東部瀬戸内海シャツトネラ赤潮広域共同調査（抄録）

吉田正雄・大塚弘之・萩平　将

本調査は,東部瀬戸内海の水塊構造と水塊の動き並びにシャットネラ栄養細胞の初期発生,増殖およびその他のプランクトンの動向について,全体像を立体的に把握し,赤潮発生要因を明らかにするとともに,赤潮発生予察技術の確立を図ることを目的として,播磨灘関係4県･水産庁および民間の各機関と共同調査を,昭和63年度から継続実施中のものである。

平成4年度における徳島県担当水域である播磨灘南東部での海象およびプランクトンの出現動向について取りまとめたので報告する。なお,詳細については,「平成4年度赤潮対策技術開発試験,東部瀬戸内海シャットネラ赤潮広域共同調査報告書」を参照されたい。

1．海　象

水温；7月までは平年並みで推移したが,8月は平年より1℃以上低く経過することが多かった。水温成層は前年より遅く7月下旬に形成された。

塩分；全般的に低目で推移し,8月中旬以降は台風の影響により低塩分化が顕著であった。

栄養塩；7月までは低く推移したが,8月の台風通過後には全般に高目で経過した。

2．プランクトン

総出現数は,前年に比べ多目で推移し,この内珪藻類の増加が顕著であった。特に7月下旬以降は珪藻類が70～99%を占めた。なお,シャットネラは,6月下旬から9月下旬の間に出現し,増加のピークは7月下旬にみられ,7月30日には最高出現数の6cells／mℓ検出された。